

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈1月11日（金）放送分〉

テーマ「奄美歳時記」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は、今年度第10回目の、シリーズ「奄美歳時記^{さいじき}」をお送りします。

1月5日は「紬の日」でした。「紬の日」は奄美市で昭和53年に定められ、今年で35回目を迎えました。「紬の日」は、奄美の基幹産業である大島紬への認識を深めるとともに、大島紬の振興による豊かな街づくりを推進するために、市民がこぞって紬を着用し、その良さを再認識することを目的としています。

さて、大島紬の歴史についてですが、約1350年前に、奈良の東大寺や正倉院^{しょうそういん}に奄美から褐^{かっしょく}色^{つむぎ}紬が献上されたとの記録があります。この褐色紬と書かれている織物は、現在のシャリンバイ染めのもとであると推測することができます。さらに、遺跡や考古学の研究者は、古代から奄美には織物があったと考えています。紀元前から蚕を飼ったり、機織りの技術が存在したりしていたことを推測できる遺跡や出土品があります。それは、古代から奄美に織物があった証拠であり、現在の大島紬のルーツになっているのではないかと考えられています。

また、名越左源太^{なごやさげんた}が幕末の奄美の様子を記した「南島雑話」にも、笠利あたりの一夫人が着ている泥染めがえがかれています。泥染めの始まりは、偶然に泥に漬けてあったものに色がついたのではないかとされていますが、その泥染め大島紬の特徴として、多くの利点が挙げられています。着物をしわになりにくくする、あたたかい風合いにする、着くずれしにくくする、絹ずれの快い音がする、素朴で渋い色調にするなどです。

その大島紬が産業として発展してきたのは、明治に入ってからのことです。1890年（明治23年）に東京の上野で開かれた第3回内国勸業博覧会^{ないこくかんぎょう}で入賞したこともあり、商品としての需要が増えていきました。その後、紬の販売先は一気に関東にまで広がり、大島紬の名前は全国的に知られるようになり、販売先もさらに広がりました。

しかし、第二次世界大戦が始まり、大島紬の生産はゼロになりました。米軍の軍政下におかれ、大島紬の復興はその見通しさえつかない状態でしたが、先祖伝来の伝統工芸を守り、島の産業をなくしてはいけないという住民の意識の盛り上がりで、わずかに残った原料で大島紬の生産を再開します。そして、流行などの情報の収集、宣伝の強化、技術の研究改善、新製品の開発なども進み、大島紬ブームをむかえるようになりました。

生活様式の変化や消費者のニーズの多様化、また、少子高齢化の進む現在、日本の着物業界は衰退の一途をたどっています。本場大島紬業界をとりまく環境も厳しく、後継者の問題や消費者のニーズに関する把握も難しい状況です。

平成24年3月に鹿児島県工業技術センターより発行された「本場大島紬 ^{はたおり}機織技術解説書」の「はじめに」で、工業技術センターの ^{かみの よしたか}神野好孝所長は、「本場大島紬の製造法は我々の祖先、先輩方が、苦勞に苦勞を重ね、永い年月をかけて造り上げた貴重な歴史的文化遗产です。私達大島紬に携わる者は、これを守り育て、さらに磨きをかけて子々 ^{しし}孫々 ^{そんそん}に残す責務があります。」と述べています。

また、同じく平成24年3月に奄美市紬観光課が発行した「奄美ガイドブック わたしたちの奄美大島」の中で、鹿児島県大島紬技術指導センター ^{あかつかよし}染色化学研究室の赤塚嘉寛 ^{ひろ}元室長は、次のように記しています。「奄美大島は今も大島紬が生きています。地域の技術、地域の人材を擁する地場産業として、しっかりと ^{めいみやく}命脈を保っています。確かなものづくりに堂々と汗を流している人たちがいます。宝石と称される大島紬に情熱を傾ける人たちがいます。全国の大島紬愛好家の夢にかなえられるものづくりに励んでいる人たちがいます。毎年開催される産地祭りで優れた製品が展示されるのを見て、私は先人から受け継いできた貴重な大島紬がこれからも生き続けると思っています。」

奄美には、伝統行事、島唄、島料理などの奄美ならではの文化がありますが、この大島紬も後世に残すべき歴史的文化遗产なのではないでしょうか。

大島紬への認識を深め、その良さを再認識して、豊かな街づくりを推進するという「紬の日」の目的を、毎日の生活の中で考えてみませんか。

以上、県立奄美図書館でした。